

第11回「日本人学生の『アジア体験』コンテスト toベトナム・ミャンマー・ラオス」

入賞者企画実施報告書

テーマ「ベトナム・ミャンマー・ラオスで体験したいこと」

①野澤 奈央（武蔵野美術大学 造形学部）

実施国：ベトナム

テーマ：ベトナムで伝統工芸を学び、現地の人々と交流し文化を深めよう

目的：大学でクラフト（手仕事による制作）を専攻。クラフトのすばらしさ（＝モノを通して人と人との心が通じ合えるところ）を伝統工芸がさかんなアジア地域に行って学び、現地の人と交流をしたい。その経験をこれからの制作に生かし日本の消費社会にアジア地域の工芸品の魅力を伝えていきたい。

実施報告書：[\[PDF\]](#)



ろくろ体験の様子

②光山 拓実（東京農工大学 農学部）

実施国：ベトナム

テーマ：ベトナム人の“元気”の秘密を薬草（ハーブ）とコーヒーに探る

目的：ベトナムのフエを拠点としてベトナム料理における薬草の使い方・食べる頻度etc.並びにベトナムのコーヒーに関連した文化（淹れ方、飲む頻度、容器などの関連品のありようなど）の調査を行う。調査結果を通し、日本文化との違い・「多様性」のあるベトナム文化を多くの人に知ってもらう。

実施報告書：[\[PDF\]](#)



ヤータン村・犬料理屋にて

③緒方 亮介（東京大学大学院 新領域創成科学研究科）

実施国：ベトナム

テーマ：ベトナム人の生活レベルにおける聞き込み調査
～優先順位を明らかにする～

目的：「世界一の会社を作る」金を儲ける為だけの会社ではなく、世界の貧困削減に寄与しながら日本の競争力を高め人々の暮らしを大いに豊かにする会社を作りたい。急激な経済成長を遂げるベトナムに着目し、ベトナム駐在企業と現地人、現地駐在日本人への聞き込み調査を行う。

実施報告書：[\[PDF\]](#)



小学生と絵本づくり

④船引 紫緒梨（関西大学 政策創造学部）

実施国：ラオス

テーマ：学生と小学校をつなぐ絵本プロジェクト

目的：タイの影響が強いラオスにおいて、現地大学生とラオス語で書かれた絵本を製作し、児童にラオス独自の文字を理解してもらうと同時に本への興味を引き出す。作った絵本は小学校の教材の一部として保存してもらう。

実施報告書：[\[PDF\]](#)



ラオス舞踊を学ぶ
1年～3年生の生徒たち

⑤中村 紀恵（神田外語大学 外国語学部）

実施国：ラオス

テーマ：異文化理解と人との関わり合い

目的：日本とタイの2ヶ国の国籍所持。日本とタイはラオスを占領地とした歴史があり、日本人という視点だけではなく、タイ生まれを活かしてこれからの3国間について考えていきたい。文化の重要性やコミュニケーションの楽しさやそこから生まれる可能性を見出していきたい。

実施報告書：[\[PDF\]](#)

ーベトナムで伝統工芸を学び現地の人々と交流し文化を深めようー

武蔵野美術大学 造形学部 1年 野澤 奈央

■企画を実施する国・・・ベトナムー首都ハノイ

■活動期間・・・2011年 2月15日～2月25日

■目的・・・美大では工芸と工業製品を学ぶ。

2年生の後期からはテキスタイル（染・織）を専攻予定。

自分の視野を広げるため、アジア地域の伝統工芸の技術を体験する。

■活動の概要・・・ハノイ近郊の伝統工芸村2箇所を訪問

・ヴァンフック村

質の高い絹織物で有名なハータイ省ヴァンフック村を訪問し、

絹織物の製作過程を見学し、体験させていただいた。

→MaoSilk 工房にて実施

・バッチャン村

バッチャン焼きで有名なバッチャン村を訪問し、陶磁器の製作過程

の見学と轆轤体験、絵付けを体験させていただいた。

→ハノイ芸術大学で教授を勤め、バッチャン焼き絵付けアーティスト

トでもあるリ・クアン・チェンさんの工房で実施

ヴァンフック村 -Van phuc-



ヴァンフック村入り口にある看板

ハノイの南西約 10 km のところに位置するヴァンフック村は、シルク織りの村として有名であり、「シルク村」とも言われている。

今回は、この村にある Maosilk の工房見学と、体験をしてきた。Mao Silk は村で一番大きな工房を所有しており、大量の絹織物を生産している様子が覗えた。工房で作られた絹製品は隣接されたシルクショップで洋服やバック、ストールと形を変えて売られていた。ショップの中は外国人観光客でとてもにぎわっていた。



鮮やかな彩色の洋服

工房内は薄暗く、「ガタン・ガタン」と織機の稼動している音が響き渡っていた。



工房見学をした後、自分が日本の美大で工芸を学んでいることを片言の英語で伝え（ここは観光地で有名なのでたまたま英語が通じた）「織機を体験させてほしい」という気持ちを伝えると、本当は見学しかできないのに、承諾してくれた。本当に嬉しかった。



織り機体験の様子

「糸を1本1本紡ぐことはあなたにはむずかしい」英語で言われたので、機械で織りを体験させていただいた。糸を織機の端にセットし、稼働させると糸が右から左へ移動するのだ。両端にはバネのようなものがついていて、それで糸が移動していた。その連続でシルク生地はできあがる。違う色にしたい場合は糸の色を交換してまたセットしていた。布を作る手段として他には手作業で1本1本紡いでいる従業員も見受けられた。



MaoSilk の従業員と思い出の写真

この村では、ベトナムの伝統的な工芸の一つである シルク織りを見学し、さらに体験させていただくことができた。

日本でも アジアの輸入雑貨屋などでベトナム製の商品は見られるが、現地に行ってみて、作っている工程から見学したあとでは見方が変わった。すてきな花柄の刺繍や、シルクの模様も一つ一つ手作りなのである。そんな誰かの思いがその商品に詰まっているということを多くの人に知ってほしいと思った。

2 年生の後期からテキスタイルを専攻する私にとって、非常に有意義な体験ができたと思う。今後の創作活動に生かしていきたい。

バッチャン村 -BatTrang-

実施期間

平成 23 年 2 月 21 日（月曜日）～24 日（水曜日）



バッチャン焼きの小物入れ

ハノイ市街から約 10 k m 南東へ行ったホン河沿いのバチャン村は陶磁器の村として有名である。今もこのあたり一帯ではレンガ作りの窯があちこちで見られるが、もともとこの村はレンガ作りが盛んであった。

この村ではハノイ芸術大学でセラミックアートの教授であるリ・クアン・チェンさんの工房で見学と体験をさせていただきました。

リ・クアン・チェンさんのプロフィール



1954 年 ハノイ・バチャン村に生まれる。

作陶しながら、1982 年にハノイ芸術大学教授となる。

1980 年にハノイのヒストリカルミュージアムで初めて個展を開き、その後、アメリカ、ドイツで個展を開催。

現在、バチャン焼絵付けのトップアーティストとして活躍中。



ろくろ体験の様子



絵付けの様子

チェンさんのギャラリーを見学した後、工房の中にある茶室で改めて自己紹介と、日本のお土産を渡した。とても喜んでくれた。工房に訪れる前に送った手紙を持ってきて「あなたに会えて嬉しいよ。」と言ってくれた。談笑のあとは、いよいよ陶芸体験！やってることはサークルでお馴染みはずなのに環境が違うせいか、緊張してしまった。チェンさんはほとんどベトナム語だから何か言われてもよくわからなかったけど、伝わってくるものがあった。その次の日の絵付け体験も私に付き合って丁寧に教えてくれた。ベトナム人の人柄に感動した。



Tuan Le さんとの思い出の写真

私が工房を訪れる前からメールの連絡をずっととってくれていた Tuan（ダン）さん。Tuan さんは chien さんの息子さんで 現在は大学生。はじめてできたベトナムのお友達。私がベトナム語の本を見ながら、片言のベトナム語で返答すると、ととても嬉しそうな笑顔を見せてくれた。お別れの日にはペンダントとブレスレットをプレゼントしてくれた、本当に嬉しかった。

今回作ったお皿も「焼きあがったら日本に送るよ」と言ってくれた。とても楽しみだ。Tuan さん本当にありがとう。



レイ・クアン・チェンさんとの思い出の写真

この度は、ハノイ芸術大学の教授である **chien**（チェン）さんにお会いできたことを本当に嬉しく思う。芸術や美術というのは、自分自身を言葉や文字で表現できなくても、「人と人との心を通わせる」すばらしい力を持っていることを 今回のバチャン村 陶芸工房訪問 を通して 改めて実感することができた。また日本の大学で自分が美術という学問を専攻し学生生活を送っていること、日本を飛び出してベトナムという地でこのような大変貴重な経験ができたことを誇りに思う。そして、この企画にご協力いただいた全ての方々に感謝している。

この経験は絶対に忘れないし、今後の学生生活と、陶芸サークルでの活動に生かしたい。

平成 23 年 2 月 28 日

ベトナムにおけるコーヒー生産農家へのファームステイならびに
ベトナム料理に使われるハーブの形態的分類を通じての文化比較

東京農工大 農学部 生物生産学科 2年生 光山拓実

I、緒言

南部ホーチミンシティより少しずつ北上しながら3週間ほど各都市・農家を見てまわってきた。このような機会を頂き、海外の農家の生き方を見てこられたことは非常に勉強になった。コーヒーとハーブという軸を持ちながらも、見るもの・聞くものを大事にした旅路にしようと思い各地の文化を体験してきた。コーヒーの生産者出荷額や各都市の調査対象の値段などの細かな値やハーブや農村に関する写真をおよそ1200枚ほど撮ってきたがA43枚という紙面の関係上ですべて載せられないのが残念ではあるがそのサマリーを以下に示していく。



II、活動地域

ホーチミン→ヤータン村→ダナン→フエ→ハノイ
→フエ→ホーチミン

という流れで移動し活動を行ってきた。

*ヤータン村・・・(ダラットより北に20km、バンメトートから南20km程度に位置するコーヒーの生産がさかんな村)

III、活動内容

A,ヤータン村でのファームステイを通じて、現地のコーヒー生産方式ならびに生産者にとってコーヒー生産がどのような影響を与えるかヒアリング調査。現地ではファームステイ先のフォアンさんにガイド・通訳していただきながらコーヒーの生産方式・ヤータンでの農業などをお聞きした。

B,フエにおいてベトナム人のコーヒー飲料習慣についてのアンケート調査(サンプル数は50人、フエの都市部に住む人が対象)を行った。を現地のフエ大学のフウオン上級講師殿ならびに学生さんの協力のもと行う。そもそもこの調査はベトナム人1人あたりのコーヒー消費量の少なさについて疑問に感じたため行った。1人当たり日本に対してたった5分の一しかコーヒーを消費していない。これらを説明するファクターとして①1杯を飲むスピード、生活習慣の違い②お茶を飲む文化も存在し、お茶との競合を示す可能性③コーヒーがデザート的な性格を有する商品として飲まれている可能性などを想定して調査に臨んだ。また、市場での取り扱い調査もこの活動に含まれる。

C,ハーブ(強い香気をもつ薬物野菜の類と定義しておく)を生産農家(ヤータン・フエ)・市場(全都市)・利用現場(全都市)の3つの位置について調べることでベトナム人にとってのハーブとはなにかを捕らえた。

IV活動で明らかになったこと

A, ・ベトナムのコーヒー栽培は現地の人にとって収益性の点でインセンティブが持てる作物であることがわかった。また生産地域では私設企業の倉庫、精製場、コーヒー用肥料の販売会社などが比較的近い距離に固まっており地域でいったいとなって経済活動に寄与していることがわかった。

・今後、過剰なモノカルチャーが進まないか心配となった。今回訪問したヤータン村では天水に頼った生産方式を採用しており、雨季である5月頃に水をためるそうだ。

すなわち、無理のある生産を仮にしようとする水不足による収穫量の減少が予想される。

ある農科では水が比較的少なく済むキャッサバを生産しているが、水があるなら収益性に富むコーヒーを栽培したいと言っていた。

・また、肥料を除く農薬を幼木を育苗するとき以外はほとんど使わないような生産方式を採用しているらしく、比較的人の出入りが少なそうな農村であるのであまり問題にならないのかもしれないが、植物防疫の観点から言って病気が起こらないか心配となった。

B, 上記の想定したファクターに加え、いくつかの要因が絡み合い1人あたりの消費量の値に影響していることがわかった。

① ベトナム人のコーヒーの消費スピードは日本人のそれとくらべてかなりゆったりとしている。多くの人間が指摘していた「ベトナムでは若いカップルのデート先はカフェだ。1杯のコーヒーで1時間はおしゃべりをして幸せなひと時を過ごすのである。」という言葉がそれを示している。時間をきちんと計ることはできなかったが、おおよそ経験的にいって1杯で30分以上はカフェにいる。彼らにとってコーヒーは親しいものとおしゃべりをして人生をエンジョイするための切符なのだ。

② お茶は多くの場合、コーヒーを飲むと一緒にについてくる。甘いコーヒーをお茶で口直しといったところだ。アンケートの結果からもそれが伺えた。

③ 甘いものを好むような傾向が示唆された。感覚的には南部のほうがコンデンスミルクの比率が高いように感じた。ベトナム人の文化として、甘ければ高級のような潜在意識も示唆される。通常のミルクにでさえコンデンスミルクを入れたりするのが彼ら流のもてなしだ。

④ 想定した要素以外に、混ぜ物をしているということもわかった。すべてのコーヒーがそうだといわけではなく、Trang Nguyen coffee など大手の企業がだしているコーヒーは100%コーヒーであるが、市場や一部の小売ではトウモロコシを焙煎して粉に30%混ぜて販売するというケースがあるようようだ。いくつかの証言や都市部でのコーヒー小売でその画像も撮影した。

⑤ 統計のとり方において市場を小さく見せるような操作が加わっている可能性も否定できない。

これらの要因で見かけ上は1人当たりのコーヒー消費量は少なく見える、しかし現地を見ればすぐにわかることだが、この国の人間はコーヒーを愛してやまない。数値だけでは判断できぬコーヒー消費大国であると私は思っている。

C, ハーブに関して、どの地域でも共通して見られるハーブは存在した。また、料理特有のハーブもある。(犬料理特有のハーブがその一例だ)。ハーブの中の成分の問題もあると思われるが、ベトナムの生活を体験して感じ取ったこととして、ハーブの匂いが重要だと感じた。ベトナムの街中には匂いにあふれている。一番いい例は市場の肉や魚のにおいだ。我々が嗅げば臭いと感じるにおいも彼は平気な顔である、むしろ

それで食欲を掻き立てられるようだ。ハーブも同じく、匂いが強く日本人には癖が強いととられるが、おそらくこの匂いこそがヒトをはっと覚醒させる。すなわち鼻で食べ物を味わい、人間の五感をいきいき働かせているような生き方が彼らの元気の秘訣だと感じた。

V 今後の課題と展望

・ベトナムの経済的発展につれてコーヒーをゆっくり飲むという文化が変容していくことが予想される、またコーヒーの国際価格の変動は大きく、世界でも大きな需要をもつ。このような作物の生産は時代に鋭敏に反応して変容していく。このようなベトナムのコーヒー事情については継続して興味をもっていきたい。また、他国との比較を行えるとよい。また、今回の企画によりコーヒーの奥深さを思い知らされた。

・ベトナムのとある農村の風景・生き方というものを体験して多くのことを考えさせられた。とくに今後大きな転換余儀なくされる日本のエネルギー政策についてのヒントが、一見粗放的で牧歌的ながら、おそらく種々の組み合わせにより成立する調和的なヤータンの農業にあるのではないかと感じた。

・ベトナムにおけるハーブの使い方を都市部ごとに比較したが、季節間の違いもあると思われる。また、若い層のなかにはハーブ特有の強いにおいを嫌うものも存在し、経済的な発展につれてハーブの利用がどのように変わるか興味深い。

V、最後に

現地であったベトナムのかたがた、国立国際奨学財団のみなさま、アドバイスをしてくださった多数の本学教官ら、フエ大学の先生・学生のかたがた、心温かくさまざまなものを体験させてくださったヤータン村のかたがた、ヤータンへの取次ぎをしてくださった大田さん、日本でベトナムハーブを生産している伊藤さんや浅草にあるベトナム料理屋「Authentique」のシェフの中塚さんなどなど多数の方に支えられて通常ではできぬ体験をさせていただけたことに対して心よりお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。



左 フエ大学にて

右 ヤータン村にて犬料理屋にて（私は左より3番目の人物、右から2番目のかたが案内をしてくださった）

日本人学生の『アジア体験』 報告書

東京大学大学院 新領域創成科学研究科
国際協力学専攻 緒方亮介

1 企画実施概要

本企画は、「急速な経済成長を遂げるベトナムにおいて、今、現地人は何を必要としているのだろうか」また、「現地に進出している日系企業の戦略は現地人のニーズと合致しているのだろうか」というリサーチクエストを発端としたものである。

「ベトナム」という国が、各国企業の生産拠点として、または販売拠点として世界から注目されていることは周知の事実であるが、その進出企業が実際に現地人のニーズと合致した戦略を取っているとは限らない。

彼らは今、何を考え、何にお金を使い、どのような生活を営んでいるのだろうか。現地進出企業の取る戦略はいわゆる「押し付け」ではなく、彼らのニーズに合致しているのだろうか。これを明らかにするため、以下の方法により現地調査を行った。

本報告書は、掲載ページ数の制限上から、今回行った全調査の中から、「現地人に対する食品の需給満足度に関するアンケート調査」と「ベトナム進出日系企業へのインタビュー調査」のみを抜粋し、掲載する。

2 調査対象と方法

調査期間	2011/2/18 - 2011/2/24	2011/2/24 - 2011/2/25
調査対象	ベトナム現地人	ベトナム進出日系企業
調査方法	アンケート用紙に記入	インタビューを実施
調査場所	ハノイ、ホアンキエム湖周辺	ホーチミン支社

表 1 調査対象と方法

2.1 ベトナム現地人への需給満足度に関するアンケート調査

アンケート用紙は、日本製食品に対する需給満足度に関する質問を記述し、表 1 を埋めて頂く形で進めた。表 1 の詳細に関しては、3 章の調査結果で述べる。

2.2 ベトナム進出日系企業へのインタビュー調査

某日系食品メーカー(以下、A 社とする)、ベトナム支社 Marketing Director に対する一対一でのインタビューを、一時間半程度行った。

ここではベトナム国内での事業展開に関する質問を中心とし、事業戦略において重要視する点について伺った。A 社は、ベトナムに進出して約 20 年であり、従業員数はベトナム社だけで 2,000 名を超え、現地駐在日本人も 10 名以上、工場も国内に数箇所所有していることから、大規模な展開を行っていると言える。

現地人への知名度も高く、現在のベトナム食品業界において揺るぎ無い地位を築き上げており、日系企業でベトナムへ進出した企業の中では、明らかにトップレベルでの成功を収めている企業である。

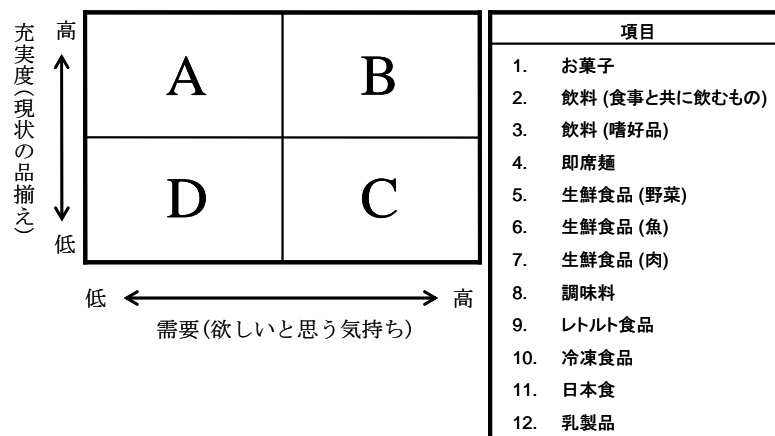


表 2. 日本製品への需要と現状の充実度に関する意識調査

3 調査結果

本章では、現地調査結果をまとめる。

3.1 節ではハノイのホアンキエム湖周辺で行った現地人へのアンケート結果を、3.2 節では A 社へのインタビュー結果を記述する。

3.1 現地人の日本製品への需給満足度に関する調査結果

表 1 において、「A」の категорияに入る項目は、需要は低いが充実度(品揃え)が高い。ゆえに、その項目については供給過多と言える。また、「C」の категорияに入る項目は、需要は高いが充実度が低い。ゆえに、需要過多と言える。同様に、「B」の categoriaに入る項目は需要も高く、充実度も高い。ゆえに、現地人はその項目にかんして満足しており、「D」の categoriaは需要も充実度も低いことから、現地人は「不必要である」と考えていると言える。

結果は、図 1 にまとめた。本調査のサンプル数(アンケートを採取した人数)は 78、表 1 に関する総プロット数は 802 である。

カテゴリー別に見ていくと、供給過多を意味する A の値が大きいのは「お菓子」、「生鮮食品(魚)」、「調味料」、「レトルト食品」である。また、満足を意味する B の値が大きいのは「即席麺」と「調味料」、「乳製品」であり、需要過多を意味する C の値は「飲み物(食事)」、不必要を意味する D は「日本食」の値が大きい。

また、需要の高さで分けた A と D の和、B と C の和について見ると、「即席麺」と「乳製品」、「飲み物(食事)」について需要が高いことが分かる。また、「冷凍食品」と「日本食」に関しては需要が低いことも分かる。

同様に、充実度の高さで分けた A と B の和、C と D の和について見ると、「即席麺」、「調味料」、「お菓子」が高く、「冷凍食品」と「日本食」が低いことが分かる。

このことから、日系企業の現状でのベトナム人向け食品サービスの有効的領域は、「飲み物(食事)」であると言え、実際に現地スーパーマーケットに目を向けると、現地メーカーの商品がずらりと並んでいるのが垣間見えた。

図 1 現地人の日本製品に対する需給満足度俯瞰図

		A	B	C	D	合計	多	⇄	少
1	お菓子	22	26	13	10	71	B	A	C
2	飲み物(食事)	15	21	20	6	62	B	C	A
3	飲み物(嗜好品)	15	19	12	13	59	B	A	D
4	即席麺	15	45	9	5	74	B	A	C
5	生鮮食品(野菜)	12	25	14	15	66	B	D	C
6	生鮮食品(魚)	21	22	11	11	65	B	A	C
7	生鮮食品(肉)	19	20	12	11	62	B	A	C
8	調味料	21	31	5	10	67	B	A	D
9	レトルト食品	21	14	10	18	63	A	D	B
10	冷凍食品	18	11	12	23	64	D	A	C
11	日本食	9	11	10	31	61	D	B	C
12	乳製品	11	36	9	10	66	B	A	D
13	その他	6	4	5	7	22	D	A	C
	合計	205	285	142	170	802			

3.2 現地進出日系企業へのインタビュー結果

某食品メーカーA社の Marketing Director に対し、A社が事業戦略として重要視している点に関するインタビューを行った。その中で明らかになった点は、以下の三点に絞られる。

第一に、「現地のニーズを抽出すること」である。海外展開をする日本企業は、日本での成功体験を他国に当てはめて進出しようとするが、各国には固有の文化、慣習、ライフスタイルのレベルがある。それぞれに最適な戦略を取ることが最も大切である。

第二に、「地元根付いた企業になること」であり、その方法論としては「地方への徹底的な営業を行うこと」、「現地人の手の届く低価格設定」である。観光地化しているハノイやホーチミンだけでなく、田舎の貧しい農民達にも手の届く値段設定にし、営業を行うことで地元根付いた企業を作り上げた。

第三に、「彼らのライフスタイルに合った商品を出すこと」である。ベトナムにはベトナムのライフスタイルのレベルがあり、彼らの生活の中に取り入れてもらえるような商品を出すことで、人々の食生活、そして社会の発展に貢献できると考えている。

4 まとめ

今回の調査で明らかになった点は、以下の三点に絞られる。

第一に、ベトナム人は日本製品に対し、品質の観点からは一定の評価を下しているが、価格と品質を天秤にかけた上で、現状ではベトナム製の製品を選んでいる状況である。

第二に、日本製品の中で、「お菓子」、「調味料」、「乳製品」、「即席麺」は現状で既に流通しており、ベトナム人もそれを選んでいる一方で、冷凍食品やレトルト食品、日本食に対し、彼らは必要性を感じていない状況である。

第三に、上記の二点を引き起こしている要因は、「彼らの持つ情報の少なさ」と「彼らの現状のライフスタイル」である。ベトナム人は、自分達の持っている限られた情報の中で、各人のライフスタイルに合った商品を選び、消費している。

彼らがもう一つ上のライフステージに上がり、様々なメディアを媒介することによって新しい情報を得、生活環境が変化していった時、冷凍食品や日本食、レトルト食品に対する需要も高まると考えられる。その時にもう一度本調査を行い、双方の結果の比較を行ってみることも、極めて興味深い。

以上

実施報告書 “絵本プロジェクト I n ラオス”

関西大学 政策創造学部 船引紫緒梨

<目的>

- 1、 現地学生と絵本をつくる
- 2、 絵本を小学校に贈る
- 3、 小学生と絵本を作る

<日程>

ボランティア探し：2月18、19日

絵本作り：2月20日～3月7日

小学校訪問：3月8日

<使用物品>→準備は日本で購入 及び 現地調達（ラオスのビエンチャン、タイのノンカイ）

フラットファイル、クリアポケット、紙（スケッチブック、コピー用紙）、マジックペン（太・細）、カラーペン、のり、シール、色鉛筆、クレヨン、クーピー、修正ペン、修正テープ、鉛筆、消しゴム、厚紙

<内容>

- ・ボランティア探し

（12月末～2月中旬）

ビエンチャン高校内てっちゃんねっとトレーニングセンター、チャンパ日本語学校にて募集案内を掲示（2月18、19日）

日本語授業の最初に企画の紹介と、ボランティアを募集

- ・絵本作り（2月20日～3月7日）

協力してくれた現地学生・生徒：約20名

募集案内を見てきてくれた学生、呼びかけをきいてきてくれた学生、友人の友人など、協力してくれた学生は様々。ほとんどが、ビエンチャン高校の生徒。そのほか、この企画を知ったラオスを旅行中の日本人も色塗りなどの作業を手伝ってくれた。

絵本は、全10種類。当初、オリジナルを作成予定だったが、ストーリーを英語で準備していたため、現地学生がストーリーを完璧に理解し翻訳することが困難であるため既存の絵本を手作りで真似てつくことにした。

作業場所はビエンチャン高校内のてっちゃんねっとトレーニングセンターの吉田さんのご厚意で、教室をお借りし、2週間をかけて作成した。高校での作成は、午後のみのため、空いた時間を使い友人の家やメコン川の近くでも作成をした。高校の教室をお借りできたことで高校生が放課後に集まり易かった。



左) てっちゃんねっとトレーニングセンターの教室で絵本作成 右) 友人の家にて絵本作成
・小学校訪問（3月8日）※ラオスでは、女性の日として祝日のため、小学校は本来休み。

企画のために集まった小学生は約20名、手伝いに来てくれた現地学生は3名。小学校の先生、てっちゃんトレーニングセンターの吉田さんが通訳などお手伝いしてくださいました。

小学校では、①絵本の贈呈、②小学生と絵本作り、③交流（ボール、長縄とびを日本から持っていき、学校にプレゼントした）を行った。

- ① 絵本の贈呈では、企画で作成した10冊の絵本、絵本の材料をプレゼントした。
- ② 小学生と絵本作りでは、現地学生たちで行った企画を真似て約2時間かけて絵を1人ずつ書いてもらった。絵本の作り方を子ども達にも教え、①でプレゼントした絵本の材料を使い、簡単に絵本を作ることができることを楽しく学んでくれた。
- ③ 交流では、日本からボール2つと長縄とびを4つ持っていった。こどもたちには長縄とびが人気だった。日本から持っていったそれらは、小学校に寄付した。



左) Sywatthana school にて絵本を贈呈 右) 小学生と絵本づくり

<絵本作成手順>

企画のメインである絵本の作成手順は、出来るだけ簡単にするために工夫した。

1、 ストーリー決め

ビエンチャン高校に隣接する公営図書館にて10冊の絵本を現地学生3名と選んだ。絵本を選ぶ

ポイントとして、動物の話、ラオスの民話、文章の多くない話を優先して選んだ。動物の話は絵が描きやすく、文章の多くない話は、小さな子供でも読みやすいからである。

この10冊のうち、約15名の学生にアンケートをとり、人気の高いものから順に作成を開始した。時間の関係上、人気の高いものから順に完成させた。

2、 イラスト作成

絵本をコピーし、その絵を参考に学生たちに描いてもらった。1人1ページを振り分けた。ここで、自分の描いた絵には自分の名前を端に書いてもらった。そのため協力してくれた学生を覚えやすくなった。

3、 色塗り

出来る限り1枚1枚絵を完成させ、同人物で色をぬってもらった。人によって色が異ならないように登場人物のみ色を統一した。

4、 ストーリー

絵のページ1枚に対して1枚のストーリーにした。出来るだけ文字を大きく丁寧な字で書いてもらった。

5、 製本

表紙はフラットファイル、中身はクリアファイルにストーリーと絵の紙を入れて綴じた。表紙には大きく題名を、また日本からシールを持参し、装飾をしてもらった。裏表紙には「Picture Book Project」と期間、企画者の名前、教室をお借りした「てっちゃんねっと トレーニングセンター」の文字を入れた。

※クリアファイルは日本で用意したもの、現地で作成した手作りのものと2種類

<感想>

自分が思っていた以上に企画実行は大変だった。日本で思い描くことが、現地に行くとスムーズに行えないことや、急なスケジュール変更もあった。しかし、現地で様々な方からアドバイスを頂き、絵本を贈るだけでなく、小学生と一緒に作ることも出来、とてもよかった。

企画実行にあたり一番大変だったことは、材料の調達だった。日本で手に入ってもラオスでは手に入らないもの、高価なものもあった。色鉛筆などは、現地でも購入可能なため、現地でどう作るのかを考えながら調達出来ればよいと感じた。また、ラオスにはなくても、タイで調達することも可能だった。ビエンチャンからタイのノンカイへは、半日あれば行き来が可能であったために、材料を探しにいった。

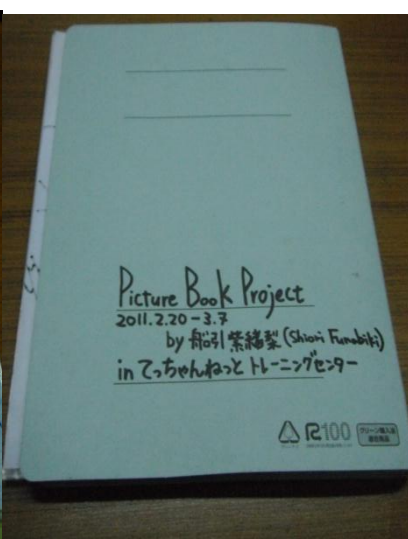
対して、一番気にしていた言葉の問題は、特に気にならなかった。英語で、簡単な単語を使いコミュニケーションをとれたこと、現地でラオス語を話せる日本人の方、日本語を話せるラオスの方がお手伝いして下さったことで、自身も簡単な単語であれば聞きとれるようになった。

今回の企画では首都であるビエンチャンで行ったが、地方でこの企画を実行したいと強く感じた。作業をする中で、田舎のほうにはもっと本がない地域がたくさんあること、学校自体に図書館がない学校も多いと聞いた。ビエンチャンでも難しかったこの企画を地方でとなると、現地の協力者を募ることが一番の問題になると思うが、是非、この企画をもう一度アレンジして行いたい。この企画を第一歩とし企画を続けることが私の次の目標であると感じた。

最後に、今回の企画でお世話になりました皆様、本当にありがとうございました。



左) 完成した10冊の絵本 右) 完成した絵本の中身



左) 完成した絵本の中身 右) 絵本の裏表紙

<異文化理解と人との関わり合い>

神田外語大学 中村 紀恵

2月23日から3月2日までビエンチャンで企画を行った。

実をいうと、ラオスについての知識はほとんど持っていなかった。他の東南アジア諸国に比べ、ニュースなどで取り上げられることが少ないと感じる。インターネットや本でラオスことを調べても詳しく書かれていない。そこで、訪れてみなければわからない文化が多くあると感じ、それを日本人やタイ人に伝えるため学んでみたい。ラオスはタイと接している国であるのにあまりに情報が少ない。タイ語もある程度通じる上に、文化もよく似ている。タイの文化、習慣も勉強している途中の段階だが似ている中でも差異性を発見し、文化を比較してみた。人との関わり合いをテーマにし、たくさんの人とコミュニケーションをとるよう心がけた。

1、宗教

ラオスはタイと同じ仏教大国であり、町にも多くの寺院が立ち並んでいた。どの寺院もとても美しい装飾だが人気があまりなく、閑散としていた。タイのお寺はいつも人がいて、僧侶と会話していたり、子どもたちが遊んでいたりとにぎやかだが全くその逆だった。お寺へは礼儀正しい服装で入らなくてはならない。



女性はシンとよばれるラオスシルクのスカートを履き、サバイ(ラオスシルクの布)を巻く。お寺へ入る際は必ずこのような格好でなければならない。ズボンやTシャツなどを入れることはとても失礼なことだそう。説明をしてくださった僧侶は、観光客は、服装は気にせずに入っていくよう進めてくださった。

ここにもラオスの人々のあたたかさを感じた。

<僧侶>

ラオスの町では僧侶をたくさん目にすることができる。まだ子どもの僧侶や中学、高校生くらいの年齢の子どもたちだ。また、托鉢では、タイでは一度お椀のようなものに入れたり、それがなかった場合も僧侶の前に一度置いてから自分で受け取ってもらい、僧侶と直接同じものを持たないようになっている。しかしラオスでは直接差し上げる物を渡すといった具合だった。

見づらいですが直接渡しています。→

少し驚いたのは、僧侶が女性の外国人に自分から話しかけているところを見た。タイ人でもある私にとってこれらはとても驚いたことだったがラオスの仏教を学ぶ良い機会となった。



2、人々の暮らし

様々な人にインタビューをしていく中で、あまりに会話がスムーズなため、何語で話しているのかと問いかけると、向こうはラオス語にタイ語を加えて話していると話してくれた。また、私が分からない言葉が出てくると、タイ語で訳して伝えてくれる人がほとんどだった。ラオス語はタイ語と似ていて理解できると思っていたがそれだけではなく、だいたいのラオスの人々はタイ語も話すことができる。聞くと、特別な勉強などを行っているわけではなく、テレビなどを見て自然に耳に入るそうだ。ラオスのテレビ番組のほとんどはタイの番組で、ラオスの放送局は3局しかない。

ラオスの人がみんな口をそろえて言うのは、物価が高いということだ。その理由はほとんどの食材などをタイから買ってきているためだという。例えばタイで30円ほどのお菓子が100円ほどするといった具合だ。しかし、収入はそれに応じておらず本職に加え、副職をして生計を立てている人がほとんどで、公務員でさえも副職をしているそうだ。

〈服装〉

前述のようにお寺へ入る際にはパーシンと呼ばれるラオスシルクでつくられたスカートを着るがこれはラオス人女性にとっての正装であると同時に普段着でもある。街で見かける女性のほとんどはこのパーシンを着ていて、会社員や小学生から大学生も制服として着ている。ラオスでは大学生まで制服があり、上はワイシャツに学校の紋章入りのネクタイ、そして下は学校指定のパーシンだ。ラオスの人々は自国の文化を大切に、誇りを持っている。



インタビューに応じてくれた大学生

ラオスの人々は語学学習にとっても熱心だ。留学へ行く人がとても多く、もちろんある程度の差はあるが3ヶ国語以上話することができる人がほとんどだった。海外へ行って勉強をする人が多いなか、そのまま海外で生活をする人は少なく、ラオスへ帰ってきて学んだことを活かしてラオスのために働きたいといった人が多いそうだ。

今回、このコンテストで同じくラオスへ行った船引さんの紹介でチャンパ日本語学校に訪れることができた。僧侶も真剣に日本語を勉強している姿はとても印象的であった。



Children home for culture and education

ラオス国立伝統文化学校に訪問した。日本にいる間、こうした施設があるという情報を得られず現地の方からお話を聞いて訪れることができた。

この学校は土日に、幼稚園の子から小学生くらいまでの児童が舞踊、楽器、機織りなどの勉強をしている。私が訪れた時は、子どもたちはいなかったが図書館を見学、先生にお話を聞くことが出来た。



わづかなラオス語の絵本、そして多くの日本の絵本や図鑑が並んでいた。子どもたちが読みやすいように文章の上に訳されたラオス語のシールが貼ってあった。



これらの本は1996年に日本から送ったものだが同じ本が多く、子どもたちはもっと本が読みたいと言っているそうだ。中にはぼろぼろになってもまだ大切に読まれている本があり、子どもたちの物を大切にすることに感動した。また、折り紙の折り方の本はあるのだが折り紙がなく、子どもたちは新聞紙などを使っているという。

日本から送られてきたものの、ラオス語で訳されたものが無く子どもたちが楽しめないスライド式の紙芝居がまだ多くあると先生から相談を受けた。そこで、日本語の文章をタイ語に訳すという翻訳をした。初めての体験で簡単なタイ語でしか伝えられず2話ほどだけであったが、こうしたことでも私が役に立てることがあると感じ、とてもうれしかった。このあと、先生がタイ語からラオス語に訳して子どもたちに読み聞かせてくれるそうだ。



日本に帰国した後、色折り紙、そしてタイにいる友人に頼んで色鉛筆やその他文房具を郵送した。これからもこの活動は続けていきたいと考えていて、少しでも子どもたちに喜んでもらえたらと思っている。



3、伝統芸能

大学ではタイ舞踊とタイ伝統音楽のサークルに所属している。そのため、ラオス伝統舞踊にも興味があった。先ほどの先生が国立伝統舞踊、音楽学校を紹介してくださったので訪れ、話を聞きつつ、授業を体験させていただいた。



学長先生と



ラオスでは伝統舞踊や伝統楽器の教育は義務付けされておらず興味のある子どもだけが学ぶ。この学校は小学5年生以上の子どもの入学条件で受験し、受かったものだけが7年間、ラオス舞踊、伝統楽器、歌唱、ラーマキエン(タイの昔話)を学ぶ。現在学生は240人で、卒業するとプロの舞踊、音楽家、芸能人などという道に進む学生がほとんどだそう。私も1～3年生(年齢にしてほしい12歳以上)の授業に参加させていただいた。ラオス舞踊は地方によって曲調や衣装がちがう。この日学んだのはラオス中央部の踊り(古典舞踊とも言われる)ゆっくりで上品さも感じられる曲にひとつひとつのポーズに意味を持つ。



手をかざす動作「踊りを楽しんでいます」



胸の前で手を交差させる動作「愛しています」



踊る際には衣装でも使われるがジョングラベンという1枚の布をズボンのように履く。授業で先生から踊りを教わる時は青い布を使用する。先生に敬意を表すためだ。明るく積極的な生徒が多く、日本舞踊にも興味を持っていたが私自身あまり知識を持っておらずうまく伝えられなかった。

ラオス舞踊を学ぶ1年～3年生の生徒たち 前述のように今までは伝統文化は義務化されていなかったが2011年度から義務教育化され、小学校の児童が週2時間、伝統文化を学ぶ時間がつくられたそう。目的としては、自国の文化を守るため、また、心の育成が期待されている。義務教育化されることでこの文化も日本や他の国々に広がっていけばいいと思う。

4、ラオスシルク



普段は見学などを許可していないが私がラオスでお世話になっていた方と知り合いだということで特別に体験させてもらった。

この工場はラオスで唯一ユネスコに登録され、



今回案内してくださったオーナーが4代目という歴史ある工場で、現在は家族で経営しているそう。

ラオスシルクは天然の染料にこだわる。



木の皮(茶色など)



オクラ(赤など)



私も実際にラオスシルクを織らせてもらいました。

足でレバーを押しながら糸を左右に移動させて織る。教えてもらいながらだったがなかなか慣れず、

目に見えるほどがたがたになってしまった。1、2時間ほど体験させてもらったのだが1センチにも満たなかった。長年やっている従業員でも

1日で2mしか織れないという。早ければいいというものではなく、質にこだわる。私に指導してくれた人は働き始めて4年で、年齢は私より年下だった。



に使われる。

このラオスシルクには柄に意味が込められていて、例えばこの布は魔よけの意味があり、生まれたばかりの赤ちゃんを包む際



5、食文化

1日3食ラオス料理を食べる！という私の目標は達成することができ、多くのラオス料理を食べることができた。一年で一度しか行われないラオスフードフェスティバルが2月24日から26日まで行われるということで私も行って来た。開会式には多くの政治家や大使館の人が訪れとても厳かな雰囲気であった。



開会式



ミスラオスの方も来ていました

一年に一度だけ行われるとあって、ラオスの様々な地域の料理や文化が集まり、外国人だけではなく、ラオス人にもラオスの食文化を知ってもらい、守っていくためにこのフェスティバルが開かれているそう。

多くは紹介しきれないのでここでは私が感じた特徴などを紹介していきたい。

- ・ 味は辛すぎず甘すぎない
- ・ 味の素を大量に入れる
- ・ 魚を発酵させたものを調味料につかう(ナムプラーではない) →
- ・ 料理と一緒に出される野菜の量がとても多い



タイ料理と似ていたり、同じ料理も確かに多くあったがラオス料理のほとんどは日本人好みの味だと思う。タイ料理が苦手な人はラオス料理を食べるべきだ。日本ではラオス料理店は少なく、あまり味わう機会がないのが残念だ。

※その他の料理はブログにて紹介しています(<http://ameblo.jp/min-som/>)



観光客は来ない朝市

6、おわりに

私は今回のコンテストでラオスに訪れた際に、異文化理解はもちろんだが人とのかかわり合いやコミュニケーションを大事にした。相手の立場や文化・価値観などを読み取り、理解することが大切であると再確認することができた。どの人に話しかけてもラオスの文化を学びに来たと言うと熱心に教えてくださり、その国の言葉で伝えるということがいかに大切なことかと学ばされた。

日本にいる間に国立舞踊学校などの情報が得られず現地に着いてから連絡をとり、訪問させていただくというかたちになってしまったが突然の訪問にも関わらず温かく迎えてくださり、様々なことを学ばせていただいたことにとても感謝している。今回も人との関わり合いによってこの企画を実行することができた。

ラオスとタイ、そして日本の関係がより深く、さらによくなっていくことができればと考えている。日本人という視点だけではなく、タイ人という生まれを活かしてこれからの3国間について考えていきたい。

今回の企画で大変お世話になった、ウィさん。大変お世話になりました。お父さんのサナンさんはラオス商工会議所の副会長をしておられる方です。



ウィさん



サナンさん

異文化理解、また、コミュニケーションの楽しさやそこから生まれる可能性を私に見出してくれたのがこのコンテストだと思っている。文化や習慣を学べば国民性を理解することができるのだ。今回の企画での目的でもあった、日本にいては他国のことを深く知ることとはできない、実際に自分の身で体験することで学べると訪れてみなければわからないことを多く学ぶ素晴らしい体験となった。このような機会を与えてくださり、共立国際交流財団のみなさまにとっても感謝しております。

※一応載せておきましたが報告書ではないので7ページまでで構いません。

